1. 現存植生
2. 動物の分布

1. 現存植生

わが国は、狭少な面積の割合に広い範囲に領土が広がり、気候的には温帯に属する部分が殆んどであるが、亜熱帯、亜寒帯に属する部分もある。また3,000 m 以上の高山もあるので、全体としては豊富な植物相を示している。

しかし狭い国土に、古くから多くの人間が生活しているため、自然とくに地表を覆う植生の破壊がいちじるしく、自然植生の残存率は全国土の4分の1以下である。

九州・四国および本州の関東以西と、東北地方までの海岸地域は、植生区分の体系ではヤブツバキクラス域に属する地域である。かつては常緑広葉樹林でしめられていたが、現在ではこの地域のうち自然植生の残存率は約4% である。

月平均10℃以上の気温が4～6か月つづく北海道南西部、東北地方全域、中部地方の山地(亜高山以上は除く)と、近畿、九州、四国の標高700～1,000 m 以上の地域は、植生区分の体系ではブナクラス域に属している。このクラス域でも自然植生の残存率は30% 以下である。

潜在自然植生は、人為の加わった植生をもつある地域から人間の影響を全く取り去ったと仮定して、その地域が最終的にたどりつくと想定される植生である。

〔凡例と作図の要点〕

この図は環境庁が自然環境保全調査の一環として昭和48～50年に調査・作成した20万分の1現存植生図を使用して編集した。

植生区分の体系は、1)相観的な方法と、2)植物社会学的な方法によっておこなわれる。1)は植物群系の概念で、Griesebach によって規定され、植物群落の知識がなくても植生の区分とその地表の他の諸現象との関係をある程度表現できる。2)は Braun-Blaunquet によって確立され、植物群落をその種組成的な類縁関係にもとづいて種々の階級の群落単位に配列したものである。

環境庁の現存植生図の植生区分の体系は主として植物社会学的な手法を用いている。

現存植生図の編集にはつぎの点に注意した。

1．全国を通した植生区分の数は、環境庁植生図が約450に細分されているので、植生の地域的な特徴を失わないよう留意して植物社会学的に類縁のものをまとめ58区分とした。
2．線状あるいは点状の形に分布する小面積の植生は、小記号をもちいてそれらの存在するおよその位置に記号を配置した。
3．亜高山帯以下の各クラス域は、植林地と耕作地などによって広大な面積をしめられ、自然植生はほとんど分布していない。このような地域で、自然植生、代償植生、植林などを一様な総合省略の基準で編集すると、自然植生などはなくなってしまう。そこで作成する現存植生図からいくらかでも潜在植生図への発展が試みられるように考慮して、各植生ごとに総合省略の基準を変え、1)自然植生、2)代償植生、3)植林地・耕作地の順に省略程度を高めた。例えば、植林地の中に存在する自然植生は小面積でもつとめて採用し、広い面積をしめる植林の一部が自然植生と複雑に入り組んでいる部分などはつとめて植林を省略するようにした。
4．寒帯、亜寒帯、ブナクラス、ヤブツバキクラスのクラス間の植生の採用の優先順位は、原則として山地にあっては寒冷地の植生を、海岸地域にあっては温暖地の植生を優先的に採用することとした。

〔資料〕

1．環境庁，1：200,000 現存植生図（都道府県別），1975
2．環境庁，自然環境保全調査報告書，1976
3．宮脇・奥田，日本の潜在植生図，1975

2. 動物の分布

わが国はほとんど温帯に属しているが、動物相は割合に豊富で固有種も少なくない。

〔凡例と作図の要点〕

この図は、個々の動物の地理的な分布範囲を表示したものである。

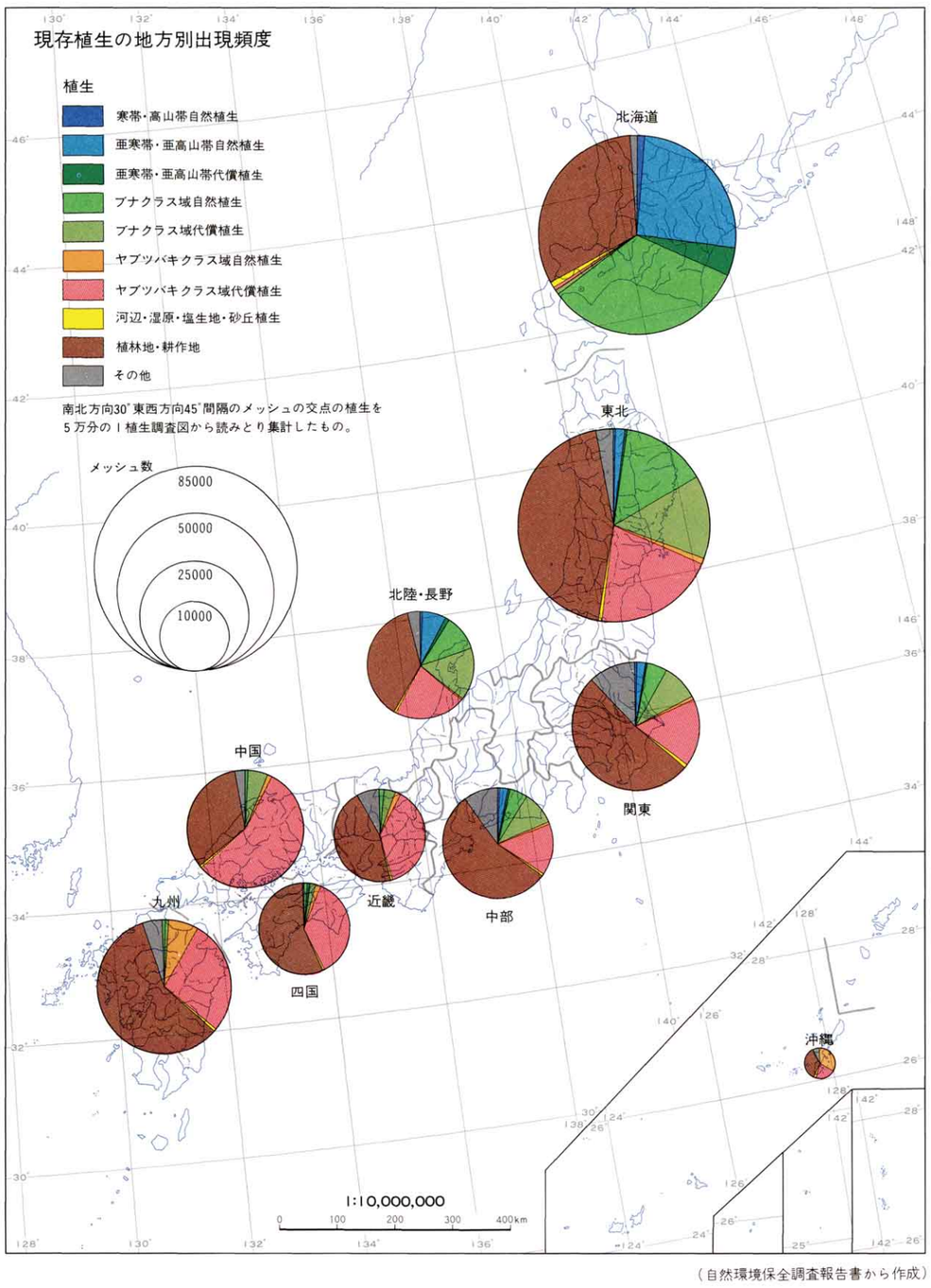
動物学における分布という言葉は、その地理的な分布を指す場合と、生態的な分布を指す場合の2つがある。生態的な分布は、個々の動物の棲息場所、例えば流水であるとか静水であるとか、日当りのよい草原であるとか、森林の縁辺の樹上とかを指す。

動物は種類によって習性や棲息場所がことなっているためその分布調査には難易がある。また分野によって調査者の数がことなっているので、各動物の地理的な分布範囲の調査が一様におこなわれていない。

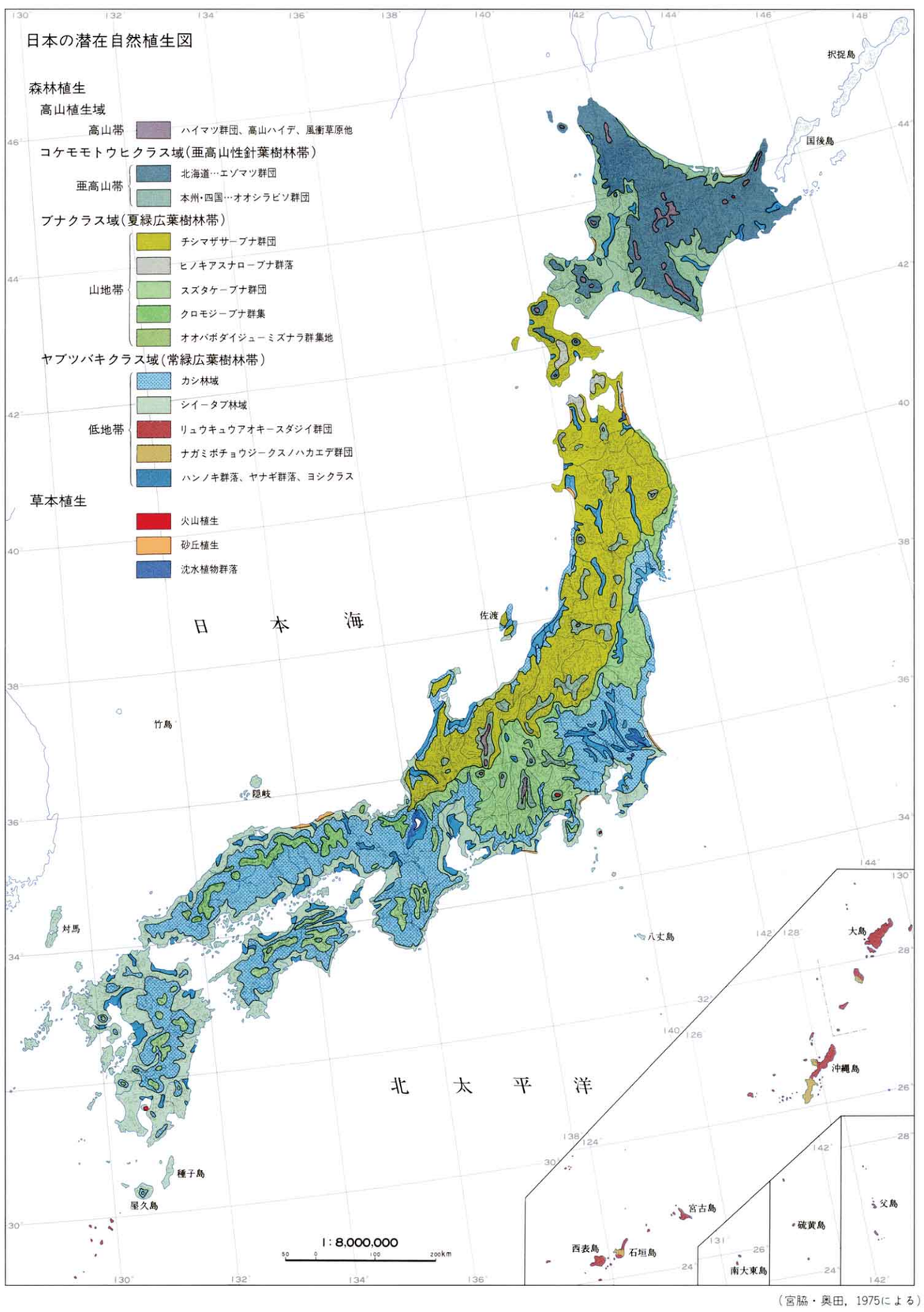
この図は、個々の種の選択にあたって、全国的な調査が比較的よくおこなわれているものや、日本の動物のなかで固有種や稀種また特徴のある群などを採用した。淡水魚のうち Salvelinus 属については種の区分で異論のある学者もある。

〔資料〕

1．国立科学博物館資料
2．日本鳥学会，日本鳥類目録，1974
3．藤岡知夫，日本産蝶類大図鑑，1975
4．環境庁資料



（自然環境保全調査報告書から作成）



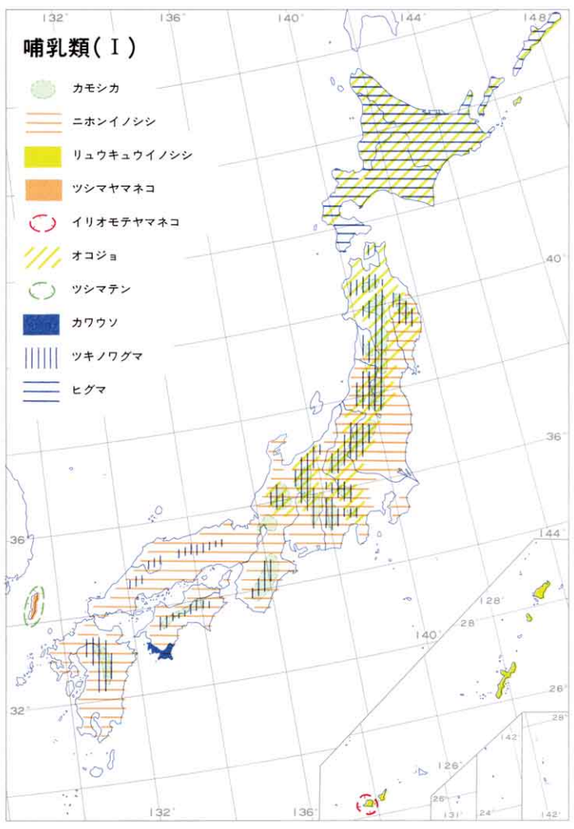
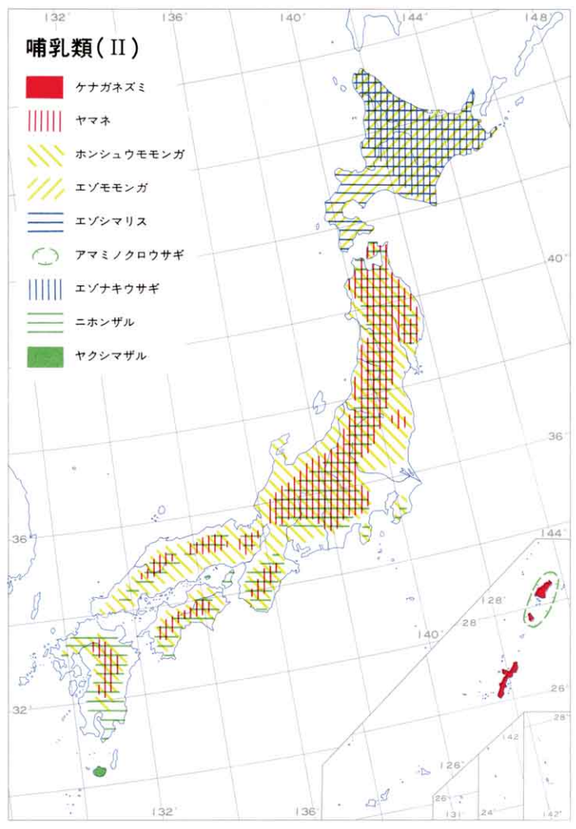
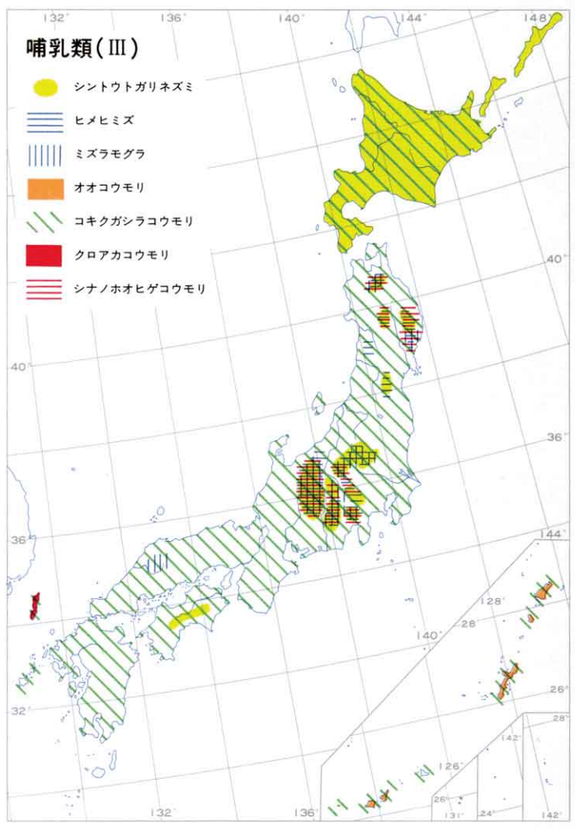
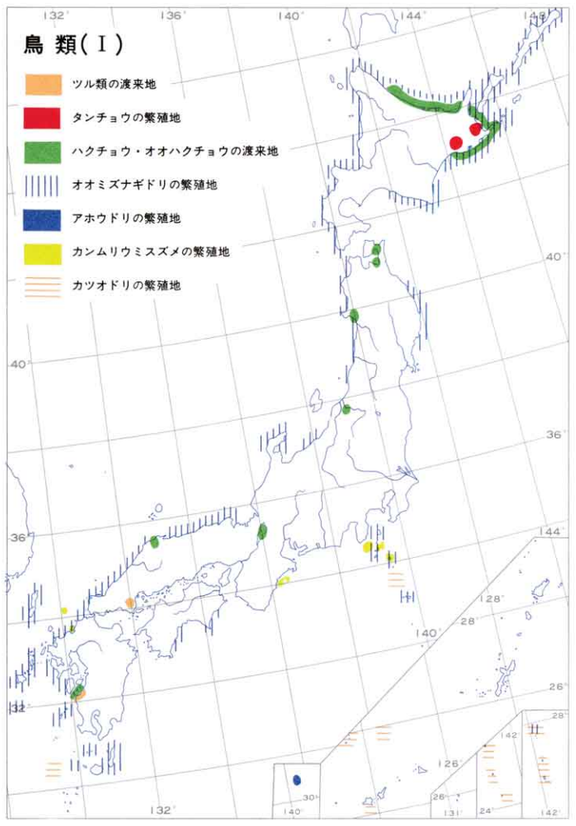
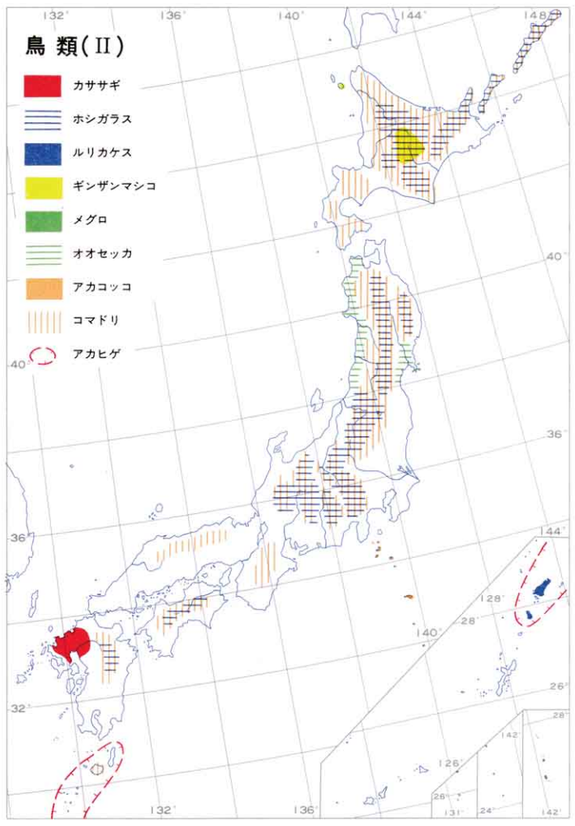
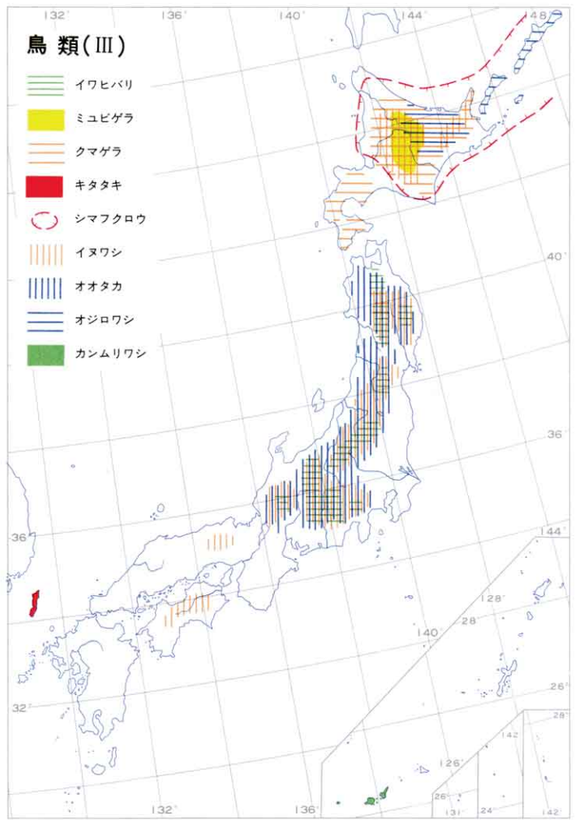
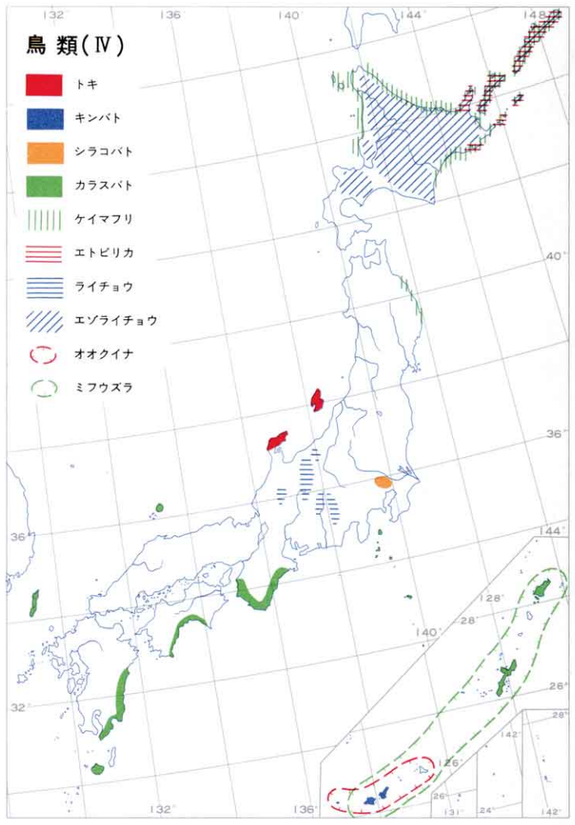
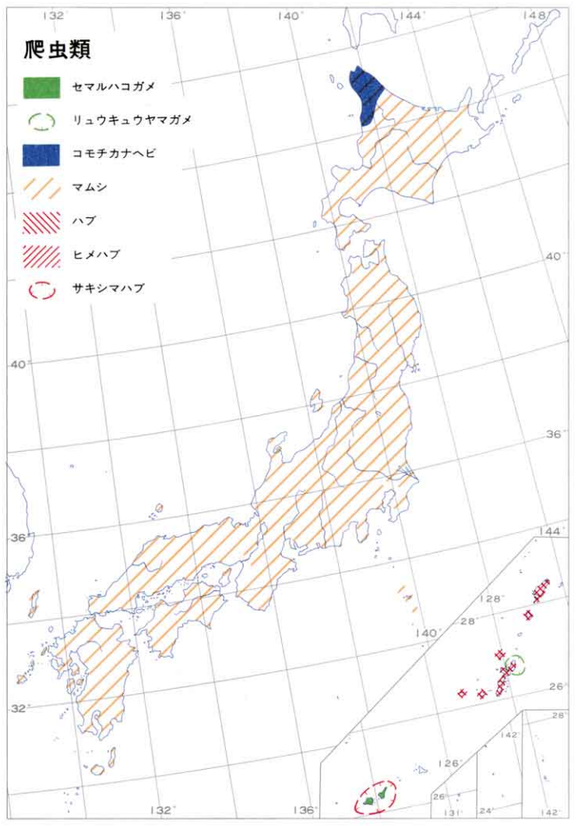
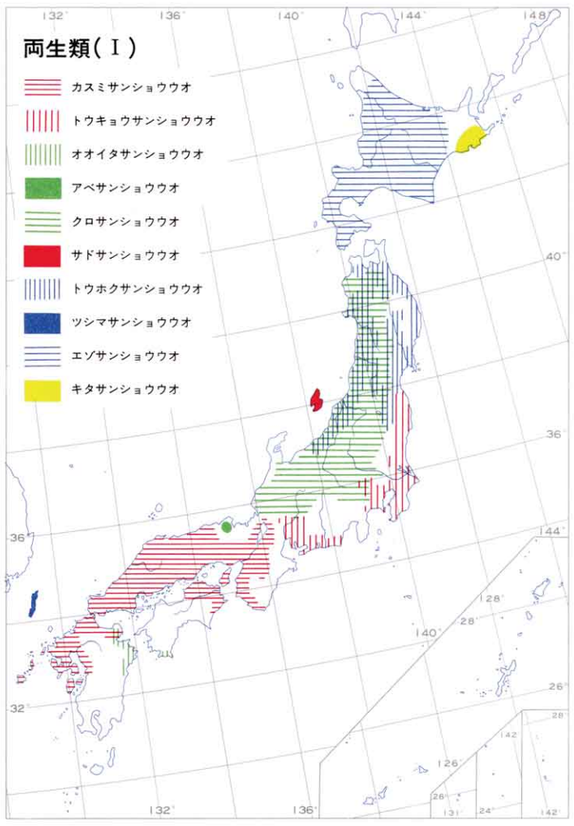
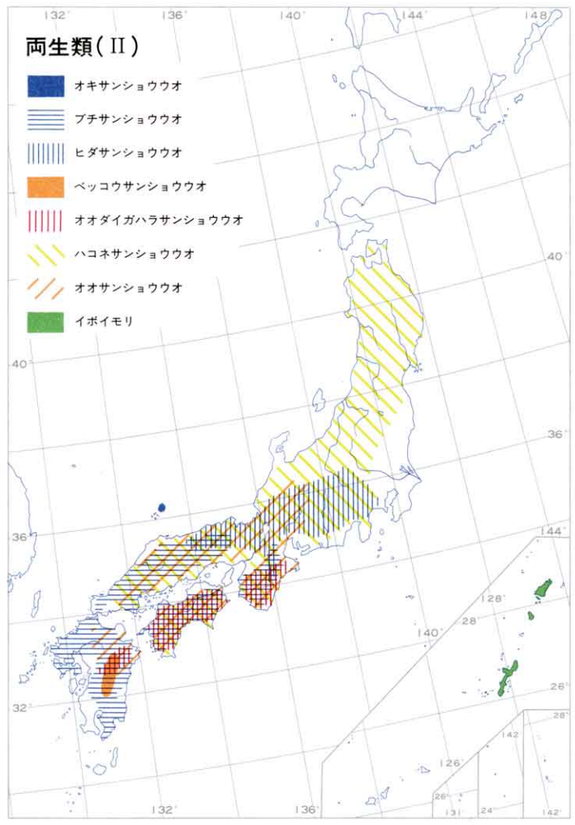
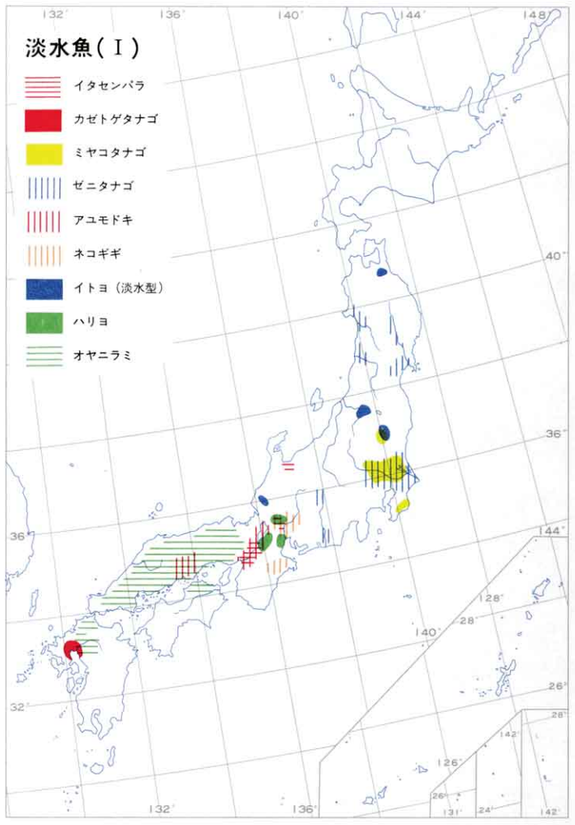
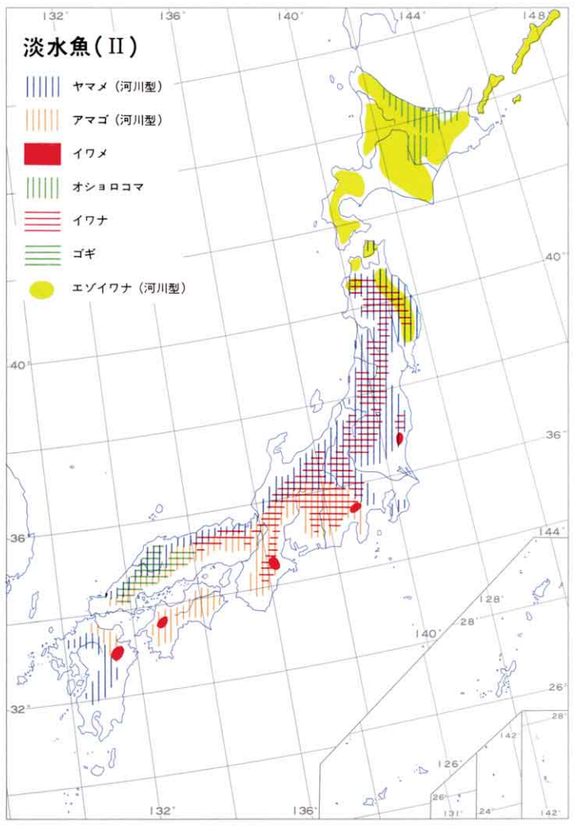
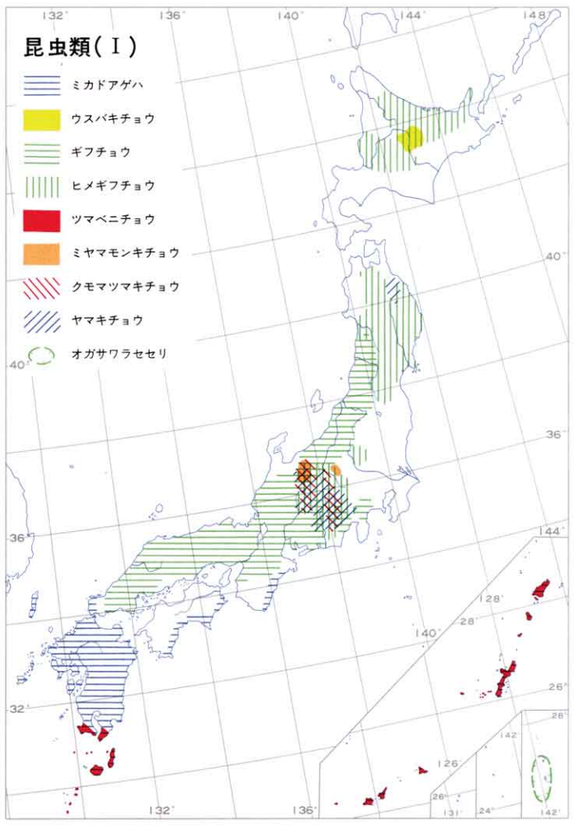
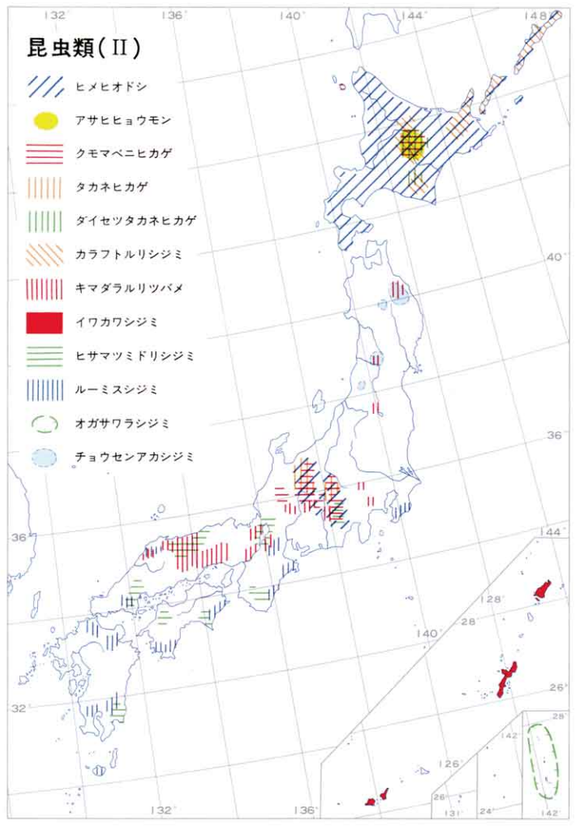
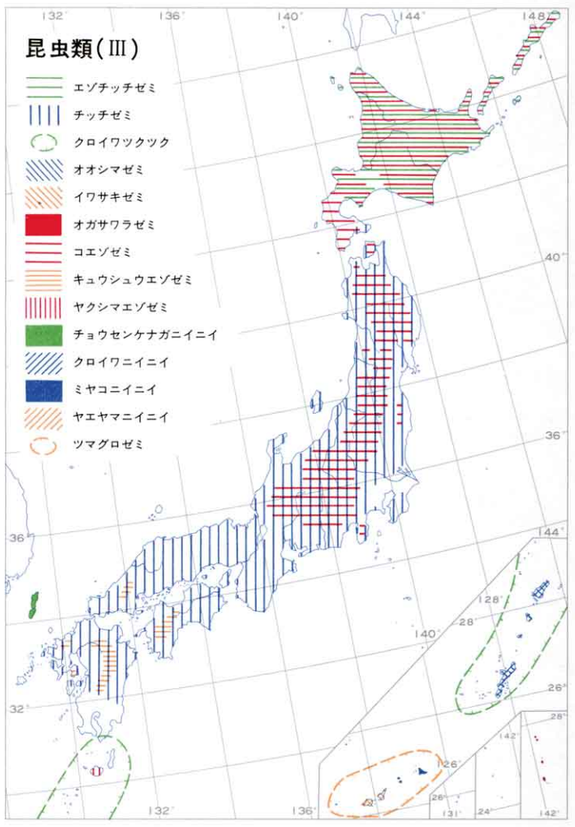
（宮脇・奥田，1975による）

5.1

現 存 植 生
寒帯・高山帯自然植生
高山低木林(コケモモ―ハイマツ群団)
高山ハイデ、風衝草原および雪田草原
亜寒帯・亜高山帯自然植生
エゾマツ―トドマツ群集
オオシラビソ群集
シラビソ群集およびコメツガ群落
キャラボク群集
シコクシラベ群集
カラマツ群落
ミヤマハンノキ―ダケカンバ群集
およびササ―ダケカンバ群落
ミヤマナラ群集
下部針広混交林
(トドマツ、ミズナラ、シナノキなど)
亜寒帯・亜高山帯代償植生
ササ群落および伐採跡地草本植物群落
ダケカンバ群落(二次林)
ブナクラス域自然植生
チシマザサ―ブナ群団
スズタケ―ブナ群団
エゾイタヤ―シナノキ群落および
サワグルミ群団
ウラジロモミ群落
ヒノキ群落、ヒノキアスナロ群落
およびクロベ群落
アカマツ群落
ヤナギ群落、ハンノキ群落
およびハルニレ群落
自然低木林および自然草原
ブナクラス域代償植生
ブナ―ミズナラ群落
クリ―ミズナラ群落
シラカンバ群落
アカマツ群落(二次林)
ササ群落、ススキ群落および
伐採跡地草本植物群落
ヤブツバキクラス域自然植生
モミ―ツガ林域(シキミ―モミ群集他)
常緑カシ林域
(イヌノキ―ウラジロガシ群集他)
スダジイ林域
(ヤブコウジ―スダジイ群集
ミミズバイ―スダジイ群集他)
タブ林域(イノデ―タブ群集他)
トベラ―ウバメガシ群集他
アカマツ群落およびクロマツ群落
(自然植生)
ヤクシマシャクナゲ―スギ群落
ハンノキ群落およびアカメヤナギ群落
ソテツ群落およびビロウ群落
マングローブ林
ガジュマル―クロヨナ群落
ヤブツバキクラス域代償植生
シイ・カシ萌芽林
コナラ群落
アカマツ群落およびクロマツ群落
(半自然植生)
リュウキュウマツ群落
ギンネム群落
ササ・タケ群落
ススキクラス
(ススキ群落、シバ群落など)
ダンドボロギク群落
(伐採跡地草本植物群落)
河辺・湿原・塩生地・砂丘(各クラス域共通)
ツルコケモモ―ミズゴケクラス
およびタマガヤオーダー
(高層湿原および中間湿原)
ヨシクラスおよびヒルムシロクラス
(低層湿原、池沼の植生)
ウラギククラスほか(塩生地植生)
ハマボウフウクラス、ハマゴウクラス
およびハマナスクラス(砂丘植生)
火山荒原植生
海岸断崖地植生
隆起珊瑚礁植生
植林地・耕作地(各クラス域共通)
スギ、ヒノキ、アカマツ、カラマツ
などの植林地
マダケ・モウソウチク林
果樹園、桑畑、茶畑など
シロザクラス(畑地雑草群落)
イネクラス(水田雑草群落)
その他
無植生地域(市街地、自然裸地など)
1973年の調査による
1:2,500,000
日 本 海
北 太 平 洋
琉 球 諸 島
先 島 諸 島
大 東 諸 島
沖 縄 諸 島
奄 美 諸 島
小 笠 原 諸 島
火 山 列 島
国 後 島
択 捉 島
歯 舞 諸 島
対 馬
佐 渡
大 隅 諸 島

5.2

動物の分布

1:16,000,000

100 0 200 400 600km